

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 31 日現在

機関番号：16201

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2011～2012

課題番号：23792709

研究課題名（和文） 施設で生活している高齢者の死生の在り様に関する研究

研究課題名（英文） Life and death of the elderly living in nursing homes

研究代表者

西村 美穂（MIHO NISHIMURA）

香川大学・医学部・助教

研究者番号：20511546

研究成果の概要（和文）：

本研究の目的は施設で生活している高齢者の死生の在り様を明らかにすることである。

研究参加者は施設で生活している高齢者8名で、平均年齢87歳、平均要介護度3.5であった。データ収集は半構成的面接で行い、生活の中で感じている死や生について自由に語ってもらった。分析は逐語録を作成後、死や生について語られている箇所を抽出し、類似したものでまとめカテゴリー化した。倫理的配慮は、まず研究参加者に寄り添い生活のリズムを把握した。そして、生活のリズムを壊さないよう自然な流れで面接を行った。

施設で生活している高齢者の死生の在り様は、【思いどろりにいかない人生の苦にさいなまれる】ことで、【今までの生き方を省みる】ということをしていた。また、【拠りどころとのかかわりに支えられ、癒される】なかで、【存在価値、生きる意味・目的を見出す】ことに向かっていることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：

This study aimed to clarify the situation regarding the life and death of elderly people living in nursing homes.

Subjects were 8 elderly people (mean age: 87 years, mean care level: 3.5) living in nursing homes. Semi-structured interviews were conducted, and we asked them to freely speak about their life and their own death. After preparing verbatim transcripts of the interview data, contents about life and death were extracted and categorized based on similarity. As ethical considerations, we closely followed the subjects and understood their life patterns, and interviews were conducted so as not to disturb the natural flow of their lives.

The elderly people living in nursing homes [reflected on their lives] by [experiencing difficulties because life didn't work out the way they had expected]. The results also revealed that they [tried to find the meaning of their own existence and meaning/purpose of life] while [being supported and healed by relationships with someone they can rely on].

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
平成 23 年度	600,000	180,000	780,000
平成 24 年度	500,000	150,000	650,000
合計	1,100,000	330,000	1,430,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・地域・老年看護学

キーワード：高齢者，死生

1. 研究開始当初の背景

総務省統計局の調べによると，わが国は平成17年に65歳以上の高齢者人口が2576万人となり，総人口における高齢者の割合は20.2%に達し，超高齢社会となった。平成22年には65歳以上の高齢者人口は2921万2千人となり，今後も増加することが見込まれている。そのため，社会全体が高齢者の姿をよく知り，かかわることが必要になってきた。

高齢者は，個人差があるものの年齢を重ねるにつれて，心身の衰退を自覚し，身体機能の低下から罹患しやすくなる。厚生労働省の調べによると，推計患者数の年次推移は，75歳以上では入院，外来ともに増加の一途をたどっていることが報告されている。また，配偶者や親しく過ごした友人を次々と亡くしていくことから，死を意識して生きていると思われる。さらに，退職などにより社会の中での自分の居場所を失いやすいことなどから，不安や孤独を抱えて生活していると推測できる。そのような体験の中で，高齢者がどのように尊厳を持ち，自分らしく生きようとしているのかを知ることは高齢者を理解する上で重要である。今村は，高齢者は若年者に比べて身体的，精神的，社会的健康の側面が弱いと推測し，スピリチュアリティの補完的役割がさらに強化・活性化されると述べており，高齢者の死や生に寄り添うためには，スピリチュアリティを持つその人を理解することは重要である。

高齢者の死や生に関する研究を概観すると，対象者の多くは，在宅で生活している高齢者であり，次いで病院で治療を受けている高齢者であった。施設を利用している高齢者を対象とした研究はわずかであった。わが国の，長寿に伴う要介護者の増加，退院患者の平均在院日数の短縮化，高齢者施設で死亡する高齢者数の増加などといった現状からみると，施設で生活している高齢者を対象とした研究が課題となる。また，研究の内容は，死生観に関するものが多く，次いで，生きがい，終末期ケア，スピリチュアルケア等であった。スピリチュアリティに関しては，様々な状況下にある高

者のスピリチュアリティの特徴，スピリチュアルペインへのケア，スピリチュアリティに関する尺度開発等の研究がなされていたが，スピリチュアリティをもつ存在として，どのように死や生に向かっているのかという在り様についての研究は少なかった。

以上のことから，本研究では，施設で生活している高齢者が，身体的，精神的，社会的な困難の中で，スピリチュアリティをもつ存在としてどのように死や生に向かっているのかという死生の在り様を明らかにする。これらを明らかにすることは，施設で生活している高齢者が，最期の時まで尊厳を持ち，自分らしく生きることができるようなかかわりを行う上で有用と考える。

2. 研究の目的

本研究の目的は，施設で生活している高齢者の死生の在り様を明らかにすることである。

3. 研究の方法

(1) 用語の定義

死生の在り様：

施設で生活している高齢者が，身体的，精神的，社会的な困難の中でスピリチュアリティをもつ存在として，どのように死や生に向かっているのかという様

(2) 研究デザイン

質的帰納的研究

(3) 研究参加者の選定基準と方法

研究参加者は，A県にある特別養護老人ホームに入所されている高齢者で，研究の趣旨を説明した上で，研究への参加に本人と家族の同意が得られた人とした。また，認知症の診断がなく，会話が可能な人，老化や疾病などにより，著しく心身の状態が悪くない人とし，全ての条件を満たす人を施設長に選定していただいた。

(4) データ収集方法

研究者は，データを収集する準備として，施設でフィールドワークを行い，研究参加者が生活している空間や状況を把握した。また，研究参加者と交流を深める時間を2日間とり，互いの緊張を緩和し，なじめるようにした。

データは，半構成的面接で行い，生活

の中で感じている死や生について自由に語っていただいた。承諾が得られた場合は、ICレコーダーに録音した。研究参加者と交流を深めた2日間得た情報もデータとした。基本属性は、研究参加者の承諾を得て、記録物や施設のスタッフ、家族から情報を得た。

(5) データ分析方法

半構成的面接の内容から逐語録を作成した。次に、死や生について語られている箇所を文脈を損なわないように抽出し、内容を要約したコードとした。そして、コードの類似したものでまとめサブカテゴリとし、サブカテゴリの類似したものでまとめ、カテゴリとした。

(6) 研究の真実性を確保するための留意点

研究者がデータ収集の道具となるため、面接技法におけるアドバイスを受けた。また、面接は、研究者と研究参加者間での認識のずれが生じないように常に面接内容の確認をとり、進めた。さらに、データ分析は、老年看護学および質的研究に精通した研究者のスーパーバイズ、高齢者を対象に研究している大学院生の意見をいただき進めた。

(7) 倫理的配慮

研究への参加は自由意思であり、途中で中断できることや、いかなる時も不利益は生じないことを説明した。また、個人情報やプライバシーの保護を約束し、保護の具体的な方法について説明した。さらに、本研究は、学会発表、論文発表する予定であることを説明した。これらの一般的なことに加え、研究参加者は高齢者であり、老化の影響を受けて心身に変調をきたしていても訴えが少ない可能性がある。そのため、面接前に面接が可能な状況かスタッフに確認した。また、面接前後で心身の不調が生じた時に備えて、スタッフの対応を依頼したが、不調をきたした人はいなかった。本研究は、香川大学医学部倫理委員会の承認を受けて行った。

4. 研究成果

(1) 研究参加者の概要

研究参加者は同意が得られた施設で生活している高齢者8名で、女性7名、男性1名であった。平均年齢は87歳で、最高年齢は100歳、最少年齢は70歳であった。平均要介護度は3.5で、要介護度は3もしくは4であった。研究参加者との交流および面接時間の平均時間は178分で、最長276分、最短111分であった。

(2) 施設で生活している高齢者の死生の在

り様

施設で生活している高齢者の死生の在り様は、【思いどろりにいかない人生の苦にさいなまれる】ことで、【今までの生き方を省みる】ということをしてきた。また、【抛りどころとのかかわりに支えられ、癒される】なかで、【存在価値、生きる意味・目的を見出す】ことに向かっていることが明らかになった。以下に、カテゴリ【 】, サブカテゴリ「 」, 特徴的な語り‘ ’, 補足説明()を用いて説明する。

①【思いどろりにいかない人生の苦にさいなまれる】

このカテゴリは、「病気や老いにより自立した生活ができなくなった辛さ」、「社会の中で役に立てない腹立たしさ」、「孤独な生活へのつまらなさ」、「将来、寝たきりの生活になるかもしれない不安」で構成されている。

「病気や老いにより自立した生活ができなくなった辛さ」は、骨折や脳血管疾患、肺疾患、老化等により、自立した生活が困難になり、生活する上での楽しみも減った中で生きる苦しみである。

“(肺気腫で)自分がやりたいことができんやろ。こんなに苦しいんだったら死んだ方がええなと思う。自分の思い通りにならんやろ。”、“年をとってきたら身体もしんどい。辛いのお。近所のおばさんと、天気の話をしたり、一緒に草抜きしたりしたいと思うの。”

「社会の中で役に立てない腹立たしさ」は、生き抜いてきた人生で得た知恵を後世に伝えたいが、思うように伝わらない苦しみである。

“若いもんには教えよるけど、言うことを聞かん。だけん腹がたつ。そいで後でああしもうたいうて後悔しよるけんの。わしが言うたときにその通りせえと言った。こういうことになるんがわかるとるけんの。”

「孤独な生活へのつまらなさ」は、自分らしく楽しく生活したいが、施設の利用者同士の交流がなく、孤独でつまらない生活となっている苦しみである。

“教会に行ったらみんな集まって歌うたり踊ったりするところがあるんです。ここは何にもそんなんをする人がおらんので。歌ういうたら私一人ぐらいで、お風呂に入ったときに湯船の中に入ったときにちょっと歌うぐらい。喋る人もおらん。つまらんで。”

「将来、寝たきりの生活になるかもしれない不安」は、今後、さらに自立した生活が困難となり、思うように生きられなくなることへの予期的な不安をもち生きる苦しみである。

“外を歩けんようになって寝たきりの人がおるやろ。あれ見たら、あんななるんかと思って、嫌なつろなる。もうそんな歩けんようになるんだったら、このままずっと死んだほうがええって思う。”

②【今までの生き方を省みる】

このカテゴリーは、「人生を振り返る」、「人生の在り方を内省する」で構成されている。

「人生を振り返る」は、現在まで生きてきた自分を回想することで、今までの生き方を省みることである。

“本読みよったら、わしの好きな言葉が出てきた。その言葉の意味を考えて解釈するのに半日かかった。今まで自分がしてきたことを思い出しての。ああこのことを言いよんかなと思うた。ああなるほどなと思う。”

「人生の在り方を内省する」は、死を身近に感じる中で、自分の人生を反省し、肯定していけるように調和をはかることである。

“(自分の人生は) 五分五分や。何ちゃええことしてない。一つぐらいいええことして死にたいと思うけどの。わしもこのままあの世行くんかな思う時もある。”

③【拠りどころとのかかわりに支えられ、癒される】

このカテゴリーは、「将来を担う子供たちに癒される」、「利用者同士の心の交流に励まされる」、「生活の中に生きる喜びを感じる」、「信念を貫いて生きてきた誇りに支えられる」、「死後の希望を託せたことに安心する」で構成されている。

「将来を担う子供たちに癒される」は、孫や幼い子供たち、自分の子供とのかかわりを通して癒される体験である。

“(保育園に訪問した時) 小さい子どもにちょっとおいで言うて来てな、ぎゅっと抱きしめてあげたら喜んで・・・楽しかった。こんな小さい子がおばあちゃん言うてくれた。可愛いね、よかった。”

「利用者同士の心の交流に励まされる」

は、同じような境遇にある施設の利用者や、自分のことを気遣ってくれる利用者とのかかわりを通して励まされる体験である。

“〇〇さんとは、人生の話をするんよ。笑ろうたり、泣いたり。気持ちがスツとする。仲よにしよな、言うて。頑張ろうなって言うん。”

「生活の中に生きる喜びを感じる」は、食事や自然の景色など、生活の中のささやかなことに喜びを感じる体験である。

“ご飯が一番ええわ。(食堂に行くと、ブッセと牛乳が用意されている。手を合わせると、ストローで牛乳を2口飲み、美味しいわと満面の笑みをこぼされる。)”、“散歩してもらって、色んなものをみせてもらって。花は気持ちがスツとするね。ああ、良かったです。生きていたらいいこともありますね。生きているのもいいですね。”

「信念を貫いて生きてきた誇りに支えられる」は、自分の軸となるものを守り続け生きてきた誇りに支えられる体験である。

“私はな競輪やパチンコや麻雀には絶対行きません。中には女でもお酒飲んだりしとった。どこに行っても一生懸命働いて、みんなが喜んでくれてよかった。幸せでした。”

「死後の希望を託せたことに安心する」は、自分がこの世からいなくなっても、自分の望みや願いが成就するよう重要他者に託すことができ、安心する体験である。

“娘に、私が亡くなった後、孫たちが大きくなっていろいろしたら、ちゃんとしてやると。大きくなってお嫁さんを貰うと思うて、全部娘にな貯金の通帳を任しとる。そやけん娘がちゃんとしてくれる。”

④【存在価値、生きる意味・目的を見出す】

このカテゴリーは、「自分の存在価値を見つける」、「生かされている意味を見つける」、「他者のためにできることを見つける」、「自分の目標を見つける」で構成されている。

「自分の存在価値を見つける」は、人生の先輩としての自分の価値を見出す体験である。

“おばさんだけや(仕事で無理をしすぎると) お腹の赤ちゃんによくない言うてく

れるんは、そやから会うたらな、お腹大丈夫言うん。ちょびっとのお話しかせんけどな。”

「生かされている意味を見つける」は、大いなるものに生かされたことに気づいたことで、自分の生きる意味を問い、見つけていく体験である。

“(戦争から)よう帰れたわ。同年兵は次から次に死んで行ったけどの、わしは守られとったと思う。死なんと帰って来られたんが一番のわしの財産や。だから、世のために尽くせいうんかいの。”

「他者のためにできることを見つける」は、無力ながらも今の自分が他者のためにできることを見つける体験である。

“どなんしたら孫やみんなが幸せにいくか考えている。孫が一人前になるまでは面倒みないかん、早よう死ねん。”

「自分の目標を見つける」は、施設の利用者とのかかわりの中で、張り合いを持ち、目標を見つける体験である。

“おんなじような病気の人がようけおるけん、ここにも。あの人たちよりも、私は軽いわと思って。自分で比較して、負けへんって。あの人トイレ行くだったら、私もトイレ行けるわと思って。”

以上のように、施設で生活している高齢者は、「病気や老いにより自立した生活ができなくなった辛さ」、「社会の中で役に立ってない腹立たしさ」、「孤独な生活へのつまらなさ」、「将来、寝たきりの生活になるかもしれない不安」によって【思いどおりにならない人生の苦にさいなまれる】体験をしていた。そして、その体験の中で、「人生を振り返る」、「人生の在り方を内省する」ことで、【今までの生き方を省みる】ことをし、内的自己を感じていた。また、「将来を担う子供たちに癒される」、「利用者同士の心の交流に励まされる」、「生活の中に生きる喜びを感じる」、「信念を貫いて生きてきた誇りに支えられる」、「死後の希望を託せたことに安心する」といった【抛りどころとのかかわりに支えられ、癒される】中で、「自分の存在価値を見つける」、「生かされている意味を見つける」、「他者のためにできることを見つける」、「自分の目標を見つける」といった【自分の存在価値、生きる意味・目的を見出す】ことに向かっていた。

考察

本研究の高齢者は、思いどおりにならない人生の苦にさいなまれる体験の中で、今までの生き方を省みることをしてきた。人生の苦にさいなまれた高齢者は、辛さや腹立たしさ、孤独、不安といったネガティブな感情を抱いている特徴があり、これらのネガティブな感情が今までの生き方を省み、内的自己を感じさせる原動力となった可能性があると考えられる。そのため、人生の苦に関して、高齢者がネガティブな感情を抱いている時は、内的自己に向かうことができるチャンスと捉え、今までの人生を省みることができるように、その人に応じた環境を作っていくことが必要だと考える。

また、高齢者は、抛りどころとのかかわりに支えられ、癒されるなかで、自分の存在価値、生きる意味・目的を見出すことに向かっていた。そのため、日常生活において高齢者の抛りどころとなるものを大切にする事や、抛りどころを見つけていくかかわりが必要だと考える。

結論

人生の苦に直面する中で、今までの生き方を省み、人生を統合していけるように、その人に応じた環境を整えることが重要である。また、施設で生活している高齢者にとって、身近な家族や、共に暮らす人たちの存在が、高齢者の存在価値・生きる意味や目的を見出すことがあることを理解し、かかわることが重要である。

謝辞

本研究を行うにあたり、快く研究に参加してくださいました研究参加者の皆様とご家族に、心よりお礼を申し上げます。また、研究の体制を整えてくださいました施設の方々、研究を進める上でアドバイスをくださった方々に深謝申し上げます。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計1件)

西村美穂、大森美津子、湯浅敦子、森河佑季、高齢者に対するスピリチュアルケアの内容と方法に関する文献検討、日本看護研究学会第26回中国・四国地方学会術集会、2013年3月3日、鳥取。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西村 美穂 (MIHO NISHIMURA)

香川大学・医学部・助教

研究者番号：20511546